

いさぎよくあってください

まぐまぐ殿堂入り・日刊メールマガジン
「今日のフォーカスチェンジ」第2090号
(2009年7月19日発行)より

私が、一人暮らしを始めたのは、19歳のときでした。

大学受験に失敗して、「自宅で浪人しよう」などと考えていた私とはうらはらに、両親は、「自宅にいては、甘えが出て勉強にならない」と、予備校の入学書類を取り寄せ、下宿まで決めてしまったのです。(そのころ、予備校のある都市は北海道では札幌だけで、私の街からは300キロ以上離れていたのです。通えません...)

その後、大学に進み、東京に出て社会人になり、一時期、1年ほど帰郷していた時期はあったものの、実質的には、10代の終わりには、親との暮らしは終わりを告げたといつてまちがいないでしょう。

あとで聴いたところによると、18歳までは、親として子どもの生活には責任をもつけれども、18歳からは本人の責任

で...と、2人で相談してあったそうです。両親の意識のなかに、「子どもは、手放すためにある。親とは、別人格の生きもの」という考えかたがあったのは、たしかです。ともかくも、何の心がまえもないままに、私は、一人で、生活することになったのです。

あれから、それなりに長い年月が流れました。

いま、振り返って、両親に感謝することはたくさんあるけれども、もしかしたら、一番の感謝は、この、19歳での手放しかもしれないなあと思います。

それがどれだけの勇気であったか、年月を経るにつれて、しみじみとわかるようになったからです。

残念ながら、私は、親になるチャンスは逃しましたが、たくさんの子どもたちとかわる生活をしています。

そして、子どもにたいしておとなができることは、最後はたったひとつだけ。いさぎよく手放すことだということを、これまたしみじみと感ずるのです。

その姿を見て、子どもたちは、自分がおとなになったとき、何をすればいいかが、

わかるのですから。

おとなにできることは、子どもたちに、自分の背中(生きかた)を見せること。子どもたちが、「ああ、こんなふうに生きてみたい」と、思える生きかたを示すこと。

完璧である必要はないけれど、いさぎよくあったほうがいいとは、思います。それは、動物の子別れの儀式を見ていれば、よくわかります。子どもの、親に対する無垢な愛情を断ち切ってやらないと、子どもは独立できないのです。独立できない子どもは、やがて死ぬしかないのです。

人間だって同じです。

どれだけ苦労して育てようと、親の最後のつとめは、子どもを一人立ちさせること。一人立ちできると確信するまで止めおくのではなく、手放してやることで、一人立ちすることができるのです。

昔は、元服というものがありません。本来、成人式がそうであったはずですが、それが形骸化してしまっただけは、一人

ひとりのおとなが、それを自覚するしかありません。

未熟な19歳だった私は、たくさんの回り道をしました。それら乗り越えることが、私をおおきくしてくれました。手放してくれたからこそその結果だったと思っています。

子どもをもつ、そして、子どもとかかわるすべてのおとなに、お願いします。どうぞ、手放すために、子どもと向き合ってください。(たいていの場合は)あなたよりも、未来の世界を見ることができ、子どもたちのために、どうぞいさぎよくあってください。

それが、いのちをつなぐということなのです。そのとき、あなた自身が本当のおとなになると言えるのかもしれない。

●日刊メールマガジン「今日のフォーカスチェンジ」(かめおかゆみこ編集・発行)は、2003年11月1日創刊。2009年4月、2000号達成。3秒で読める携帯版もあり。無料講読は「かめわざ快心塾」から♪

<http://kamewaza.com/>